



▲録音中の内田道子さん（熊本市水前寺5-24）「奉仕は家族の協力があって、はじめてできるものです」と強調されていました。



▲点字図書館のテーブル

盲人に声の図書を！

県下に一万人からの視力障害者の方々がおられます。光のない生活ゆえに、ものを知りたい、聞きたいという欲求は一段と強い筈です。その手だての一つとして声の図書があります。

現在、県下に約四十名の方が、文学作品、各種専門書等カセットテープに吹き込む奉仕に当っておられます。また月に一回、専門のアナウンサーによる朗読のための講習会も開かれています。

熊本市本山町にある点字図書館には、現在、二百七十五冊分、千八百六十六本のテープがありますが、西図書館長は「これではとても、図書館とは言えません。県民の方々のご協力をいただきたい」と話していました。

※詳細お知りになりたい方は熊本点字図書館
（熊本市本山町六二九 ☎〇九六三三五四一七九三二）
までご連絡ください。

私の提言



近年の機械文明の発達、労働の省力化をもたらす、余暇時間を増加させて快適な生活環境の中で過ごすことができるようになったが、一方身体活動の減少や精神的なストレスの増加により、脳出血・心臓病・糖尿病・胃腸障害等の文明病（運動不足病）は年々増加の傾向にあり、国民の疾病比は十三人に十人という高率を示すに至っている。

県民総スポーツ運動の展開に望む

西岡 寅雄

県内においても、疾病の増加、体力の低下現象が顕著にみられ、私の分析した壮年体力テストの結果からみても、都市部の体力は、農山漁村に劣り、三十五歳以降から急激に低下する傾向にある。体力の中でも、人間の基本的運動である「歩く」ことの減少が、脚筋力の低下となり、瞬発力・敏捷性に欠け、心肺機能を示す持久力も全国標準より劣ることが

認められた。県民の中には、健康、体力に関する関心も高まり、青少年は勿論のこと、婦人会、老人会等でのスポーツ活動も盛んになりつつある。

このような時期に、県が「新しいふるさとづくり」という県政の基本方針の中に、「県民総スポーツ運動」をとりあげ、あらゆる年齢層にスポーツを普及させ、県民の健康と体力の向上をはかり、明るくたくましい明日の熊本を築きあげようとする県の施策を樹立されたことに對し、私は、誠に時宜を得たものであると敬意を表すると共に、一日も早くこの施策が実現されることを期待して止まない。

「県民総スポーツ運動」の展開に當り、私は次のようなことを提言したい。

- (1) 県民の啓蒙について
スポーツの必要性を認識させ、自ら進んでスポーツに親しむ姿勢を作るためには、テレビ・ラジオ・新聞等による広報活動も大いに重視すべきであるが、県民自身に、自らの体力を自覚させ、必要性を認識させる事が最も効果的な方法である。そのための体力テスト会や、その後の運動処方指導を行うスポーツ相談室を広く展開することが必要である。

- (2) 施設づくりについて
県営の総合グラウンド、体育館を持たないのは九州でも熊本県だけであり、この建設も早急に望みたいところであるが、「県民総スポーツ運動」に必要な施設は、中央の大施設よりも、もっと身近かにスポーツ施設を如何に多く作るかという事である。
- (3) 指導者について
現在各市町村でも施設作りが着々と実現されつつある事は誠に喜ばしいことであるが、現有の学校の施設の開放を促進すると共に、勤労大衆の運動欲求を満たすための夜間照明施設を充実整備することが急務である。それと共に部落単位の運動広場の開設により、気軽にスポーツを楽しむような努力をすべきである。

- (4) 組織づくりについて
スポーツ振興法により、市町村に「スポーツ振興審議会」の設置を義務づけているが、現在県内では皆無といってよい。各種団体、行政が一体となり早急に市町村に即した振興策を検討する審議会を設置することが必要である。
- スポーツグループを統合して、代表者による委員会がその地方の体育協会の傘下に位置づけられ、常に連係を保ちながら、常時活動ができるよう計画を調整する事が必要である。
- また市町村における指導者会を組織し、互に協力しながら推進するよう努力すべきである。
- 健康や体力は人間の幸福の最大の条件であり、これは金で買えるものではない。毎日の努力により始めて得られることを自覚すべきである。
- （熊大教授）